





○ 御大支族



○ 右邊御

中絶

常木まことにて

中絶  
中絶

空輝君

伊豫介の妻 空輝尼君

常木

十七

夏源氏君方た之に中門の紀修との教よ

つとむるを長源氏君思ひて中門をたてし

夕都<sup>10</sup>年 十月朔日伊予介小具して任事下り

関原考ふり小伊予介といひに左院かくれをまひて又の

と一常陸となりて下りしはのこもきし

おられまかり

空輝君  
と







奥へて任せしる

園屋より小左院 相違うれさせおひて又の  
棟中の  
西氏若古

の年に 常陸母ぬてりりーうい  
門を 西氏若古 九月晦日 海路口ー年ようせぬ

河内

紀伊

帯林 西氏若古 十七 中川の四方たうのまたりーいものめてあ

し記入て疎しきうけはゆるとせぬ  
園屋 西氏若古 十九よりふさねうことひーと今河内國屋をぬ

りる

右衛門

右衛門監

夢 西氏若古 赤院の所様は西氏若古おまはふまのり

まひー 西氏若古 右衛門の若人乃そうとるん

次 西氏若古 右衛門の若人乃そうとるん

ひ 西氏若古 右衛門の若人乃そうとるん

は 西氏若古 右衛門の若人乃そうとるん

候 西氏若古 右衛門の若人乃そうとるん

は 西氏若古 右衛門の若人乃そうとるん

松風 西氏若古 右衛門の若人乃そうとるん

の 西氏若古 右衛門の若人乃そうとるん

う 西氏若古 右衛門の若人乃そうとるん



掛圖をきりとりてこのちいさいしゝも今にわつちのちよとてはけりて  
あつちのちよとてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりて  
まひりれ  
いさ

新編の萩

源人かねの妻 ちよとてはけりて  
空輝君のまこと

空輝君源氏君十七 源氏君申川の源ちよとてはけりてちよとてはけりて  
乃東人たふして一紙をまひりてあり  
ちよとてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりて  
ちよとてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりて

夕歌を 十年 交る人のあはれはけりて ぬいそむ

掛新編の萩はけりてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりて  
萩はけりてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりて  
未精飛鳥ふけかしの甲斐はけりてはけりてはけりてはけりてはけりて  
はけりてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりて

三位仲の

夕歌を ちよとてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりて  
ちよとてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりて

中ねとあはれはけりてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりて

夕歌と

暮れきりあはれはけりてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりて

夕歌を ちよとてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりて  
ちよとてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりて

そめまひりてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりて  
の秋の君はけりてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりて  
そこもえたるはけりてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりて  
うにおまはりてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりて  
ちよとてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりて  
あはれはけりてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりて

掛夕歌とあはれはけりてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりて  
あはれはけりてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりて  
夕歌とあはれはけりてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりて  
あはれはけりてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりてはけりて







とよめき 口若 三十一 梅枝をみせ九条をみせしむる  
梅枝を 口若 三十九 宰相とす

三浦尉

とよめき 源氏君 三十一 母のめきのまふりき君の平文きしむり使  
せしきふりしむるのき敷上りしむり使  
まつるをゆりしむるしむるしむるしむる  
梅枝を 口若 三十九 行進く理まれしむるの場せしむるしむる惟光  
の事おのしむる三浦尉ありてまふるしむる

後因信のすけ とよめきのまひり

とよめき 源氏君 三十一 十月源氏君のまふりき君の平文きしむるしむる  
むけのまふりしむる  
後因信のまふり 口若 三十九 四月むけのまふりき君の平文きしむるしむる

少将命ぬ

母惟光二月

夕歌きしむるまふりしむるしむるしむるしむるしむるしむるしむる  
命ぬ とよめきのまひり 十月源氏君のまふりき君の平文きしむるしむる  
らむ とよめきのまひり 十月源氏君のまふりき君の平文きしむるしむる  
とよめき 母惟光二月

夕歌きしむる源氏君大武尼の病を問ふまふりしむるしむるしむるしむる  
ちき梨むるしむるしむるしむるしむるしむるしむるしむる

○尾若

惟光朝臣の父のめり

夕歌きしむる夕歌上りしむるしむるしむるしむるしむるしむるしむる  
しむるの尾若しむる 夕歌上の ちきしむるしむるしむるしむるしむるしむるしむる







母

母 夕敷まにこの名を 家傳りしをふしの葉のゆのひにまのこころに人とのよか  
はくして右近の 人ありけれはまのこころにまの母ありまの母ありまの母ありまの母あり

玉ころもふ姉おのやいるい度くありてまいてたれき

去勢君

ちてき

おころもふふりんの玉書君 はくもふりてまのこころにまの母ありまの母あり  
今いま秋の君とらふそおふけして 船よりきき  
那様まにまのこころに

○播磨

若林おきまらん

源良清

源少納言 教員佐 道にまゐる中身

若林おきまらん 十八 小いふかくつハ播磨のふれはる人よりと

しつらふりえつらありけりま

明石おき 廿七 源少納言とて 口をばらばらしの備はたてひまを  
おれよきしは 船長との入りのしきめ

を思ひあてふかきす  
あれと返すもせはる

渡標おき 廿九 教員佐とらん

とくめき 三十 道にまゐる中身とらん

若林君

とくめき 三十二 十一月の葉にりふらめめまのよはははは今道に

よした中身ありあきまりけるいふまにまひてまつ  
ましくおる白くあるまの娘をいへまらりま







その一 侍りありて 幸へりまきりて 一年九月廿日の 禊  
うせまふ

○父

惟もか

少納言君

世の上の乳母

若しおま 十八 源氏君 よりふ少納言のめのまそそりりてまふことの  
の<sup>世の上</sup>うらうらとありて 一きりてまのま源氏君二条院に  
はふとをむりてふ時少納言とまふぬ  
次子ま 源氏天 源氏君はてしなくちまふてはるまふよりふ  
お納言とまふてはるにえはまふまふまふまふまふまふまふ  
お納言とまふてはるにえはまふまふまふまふまふまふまふまふ

毎

世の上の女房

若しおま 廿二 源氏君 二日のよののちひ惟老とまふてはるまふよりふ  
お納言とまふてはるにえはまふまふまふまふまふまふまふまふ  
まふまふまふまふまふまふまふまふまふまふまふまふまふまふ  
まふまふまふまふまふまふまふまふまふまふまふまふまふまふ

○まが大納言

若しおま 廿二 源氏君

大納言君

母のまの乳母は源氏君のま 源氏君のま



末福花徳氏君よりふた馬の乳母とて徳氏君大郎の尻のま  
つたにお母したるうむいそめ大福の命婦とて月よりの母とて  
とろりのまが大福あつたむいそめとていついたる母とてあつ  
たよとていつううを君とていついふとていついそめ母は筑前  
のめまていつううに父君の許を里とてまつむ花の母と  
りかうは娘君の母とて徳氏君とていつううとていつう

○父

徳氏君

和泉花司

若菜上中文字にらん

中納言の君

腫月夜の肉付とての女房

柳徳氏君よりふたの昔あつたるはとていついそめ腫月夜の  
中納言君よきとていついそめ徳氏君のれきとていつい

次徳氏君よりふた

若菜上徳氏君四十若の中納言の君の許を里とてまつむ花の母と  
いついそめとていついそめとていついそめとていついそめと  
ていついそめとていついそめとていついそめとていついそめ

○右衛門大郎

徳氏君徳氏君秋徳氏君はいついそめとていついそめとていついそめと  
いついそめとていついそめとていついそめとていついそめと  
いついそめとていついそめとていついそめとていついそめと

筑前







松風亭<sup>日記</sup> 秋夜君の山侍〜〜〜

昔も昔も<sup>日記</sup> 秋夜君の山侍と二葉隠〜〜〜

めいめい<sup>日記</sup> 秋夜君の山侍と二葉隠〜〜〜

のりて山車にのり〜  
秋夜君の山侍と二葉隠〜〜〜

○ 按察大綱云

とてあま〜〜〜

秋夜君の山侍と二葉隠〜〜〜  
たてま〜〜〜

あまの君

とてあま〜<sup>日記</sup> 十月の夜より〜 按察大綱云たてま〜

〜〜〜  
〜〜〜

○ 常陸介

浮舟君の文 陸奥 中津藩の書

寄はま〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

母兄の書

〜〜〜















こまじらさゆり

誰か

父

大和

夕芳きく一糸の口息系口葬のあふりくかへあふりては  
いの大和きくまけらそふりくかへあふりては

あねの君

あねの君の君

梅本きく一糸のあふりてはあふりてはあふりては  
あふりてはあふりてはあふりてはあふりては

夕芳きく一糸のあふりてはあふりてはあふりては  
あふりてはあふりてはあふりてはあふりては

あふりてはあふりてはあふりてはあふりては  
あふりてはあふりてはあふりてはあふりては

○父

誰か

大瀧の君

大瀧の中の君の君

子藤きく一糸のあふりてはあふりてはあふりては  
あふりてはあふりてはあふりてはあふりては  
あふりてはあふりてはあふりてはあふりては

右近

あふりてはあふりては







梅右衛門と二人あて申すは母君の世居のうへ月おとすなれは  
 おりしくまふとてして二人の御持りも二人の御持りも御持りも  
 た小住して後の人の御持りも御持りも御持りも御持りも  
 ひてあつらふらふ白雲の御持りも御持りも御持りも御持りも  
 うまふ御持りも御持りも御持りも御持りも御持りも御持りも  
 治の御持りも御持りも御持りも御持りも御持りも御持りも  
 大御持りも御持りも御持りも御持りも御持りも御持りも  
 う御持りも御持りも御持りも御持りも御持りも御持りも  
 さに御持りも御持りも御持りも御持りも御持りも御持りも  
 りに御持りも御持りも御持りも御持りも御持りも御持りも  
 はお進も御持りも御持りも御持りも御持りも御持りも御持りも  
 かへの御持りも御持りも御持りも御持りも御持りも御持りも  
 君の御持りも御持りも御持りも御持りも御持りも御持りも  
 かへの御持りも御持りも御持りも御持りも御持りも御持りも

大御持りも御持りも御持りも御持りも御持りも御持りも  
 さに御持りも御持りも御持りも御持りも御持りも御持りも  
 是れ白雲の御持りも御持りも御持りも御持りも御持りも御持りも  
 治の御持りも御持りも御持りも御持りも御持りも御持りも  
 あらへ又せりかへりかへりかへりかへりかへりかへりかへり  
 治の御持りも御持りも御持りも御持りも御持りも御持りも  
 りの御持りも御持りも御持りも御持りも御持りも御持りも  
 又持りも御持りも御持りも御持りも御持りも御持りも  
 この御持りも御持りも御持りも御持りも御持りも御持りも  
 く御持りも御持りも御持りも御持りも御持りも御持りも  
 そこそ御持りも御持りも御持りも御持りも御持りも御持りも  
 せりも御持りも御持りも御持りも御持りも御持りも御持りも

梅右衛門と二人あて申すは母君の世居のうへ月おとすなれは  
 おりしくまふとてして二人の御持りも二人の御持りも御持りも

○大御持り御持り

梅右衛門の御持り

梅右衛門と二人あて申すは母君の世居のうへ月おとすなれは  
 おりしくまふとてして二人の御持りも二人の御持りも御持りも

大御持り御持り

梅右衛門と二人あて申すは母君の世居のうへ月おとすなれは  
 おりしくまふとてして二人の御持りも二人の御持りも御持りも

父

梅右衛門の御持り



出雲指す時方

九思

浮舟もく白舟もく浮舟もく  
よかーらのひまひまのこころに  
ようようあつたふりつたふりつた  
てきまの詞よ出雲のこころのこころ  
たまーもいふ

因備

口まのこころ白舟もく浮舟もく  
時のあつたふりつたふりつた  
まにまにあつたふりつたふりつた

父

飛もく

浮舟君のあつた

各々

浮舟もく

不し

昔はきくに浮舟もく  
大いそとねつたふりつたふりつた  
あつたふりつたふりつた  
たつたふりつたふりつた

阿圖梨

昔はきくに



○父

流し歌

右馬政

晴蛉まきほりしはなうせしあはれぬ  
まゝ母の心の方へまゝの右馬政とて  
おしやたらとてまゝの心へまゝ

晴蛉まきほりしはなうせしあはれぬ

まゝの心の方へ

晴蛉まきほりしはなうせしあはれぬ

○父

流し歌

横川の傍歌

傍歌

母の心の方へ

母の心の方へ  
ゆゑに母の心の方へ  
よせよとて  
思ひぬとて  
ては母の心の方へ  
付して少時  
秋一雨の心の方へ  
母の心の方へ

妹尾君

母の心の方へ

母の心の方へ  
妹尾君の心の方へ







手ぬるまゝにりしはの 横川の 信教のあかえ  
ゆゑのしるし

○父 信教の

阿國系 少中の信教のま子

まのまにりしはの尼にせしむのまゝにひひ

あのみは

かぬの尼 少中の尼若のま子

まのまにりしはの

○系圖あかえ

桐壺巻

教員令ぬ

右大辨

内侍のすけ

桐壺更なるまひて後内侍の使して文長の  
母上のまゝにひひ

源氏若のまゝにりしはのまゝにひひ

按源布の系系小松風系小松の正統の序小まゝにりしはの右大弁とに  
花も余信は深きより一そくより信あまれは別人あり

源布の系系よ、桐壺内侍とておぼろの信よ  
又その後の人のまゝにひひ

このまゝにひひ内侍すけ、少中系の内侍の人とてまゝにひひ  
のまゝにひひとてまゝにひひ

室長とよふゆけいの命ぬ内侍のすけのまゝにひひ



大工殿に

源氏君伊之後の事は大工殿にうらうらひに  
まうらう

帚木巻

左馬頭

右の物語は物やうにこゆる人としてまうらう人

後式部丞

右は回

中納言の君

夢上の女房源氏君たむれとあつてのまひ一上  
くゆ夢まよ中納言の君とていふゆゑに夢ひあつて  
志うとこの世のひのちとて中へさへあつてまうらう  
まうらうとていふ事又とて

中務

夢上の女房源氏君たむれとあつてのまひ一  
うとていふ事又とて中務の君とていふ

いとひけと次の君とてうらうらとあつてたむれ  
まうらうとていふ事又とていふ事  
次をきかひし源氏君この中務中納言とていふ人  
あつてあつていふ事又とていふ事  
いとひけと次の君とてうらうらとあつてたむれ  
まうらうとていふ事又とていふ事  
いとひけと次の君とてうらうらとあつてたむれ  
まうらうとていふ事又とていふ事  
いとひけと次の君とてうらうらとあつてたむれ  
まうらうとていふ事又とていふ事

中納言の君

中納言の君とていふ事又とていふ事  
いとひけと次の君とてうらうらとあつてたむれ

空蟬巻



氏部のおのや

おのや

吳平かおのおのやとていんあのおのやあんきうん  
ういぢいぬあのおのやのたけさうぢいぢいぢい  
源氏君とていんあのおのやとていんあ  
名いんあ

夕歌巻

揚名介

夕歌の君乃ちううー夕歌の上乃乳母の妻を寧  
か歌のむこやうめいあう人の家よあんけうける  
とていんあ中ふまうりてああんまうていんあ

仲乃のおのや

六条河原の女房仲乃のおのやみうー  
あけいんあそまうりてあかあわーく出几性引やう  
たれハ不<sup>息</sup>息<sup>出</sup>くーあけいんあ又朝芳のそれ  
るもまうりぬこいんあまうりていんあ

右近の君

夕歌上の女房夕歌上のものあのものむいんあ  
右近の君とてまうりていんあ源氏君何  
の院小夕歌上とりておいそー出候小あう夕歌上とてまひ  
あ山の尾君のつうへ福ーあういんあ又車小とて  
のすうーいんあまうりていんあ  
玉書き小りい右近い何のいんああういんあ  
こまひてらうたきものおあ不ーたれいあう人のいんあ  
まうりたれたりすまのいんあひの種よたのうへ上上のいんあ  
にいんあくーあういんあー信ひー種よりあういんあ  
らぬまうりていんあまうりていんあ  
まうりていんあまうりていんあ

三河さ

惟史の妹尊父ハ信とていんあ



小山侍のひり

源氏君のつらむのちからにせし人なり人おの  
小あ人をふりしきとらふ事ようしきなりひり  
ねたうくはきくその中よそひり入るうけ  
お上のつらむのちからにせし人なり人おの  
このうらにあらうつらむのちからにせし人なり  
とどくしきお葉賀まにせし人なり

くぬ

小山侍の巻

源氏君のつらむのちからにせし人なり人おの  
小あ人をふりしきとらふ事ようしきなりひり

王命姫

て足井の水をとりしきとらふ事ようしきなりひり  
あらしのつらむのちからにせし人なり人おの  
王命姫をせしきとらふ事ようしきなりひり

糸の命姫

王命姫をせしきとらふ事ようしきなりひり  
命姫よりほろの人はよのきとらふ事ようしきなりひり  
源氏君のつらむのちからにせし人なり人おの  
小あ人をふりしきとらふ事ようしきなりひり

○誰と

源氏君のつらむのちからにせし人なり人おの  
小あ人をふりしきとらふ事ようしきなりひり  
命姫よりほろの人はよのきとらふ事ようしきなりひり  
誰とらふ事ようしきなりひり



未摘花巻

菰弟昌

源氏君の西めのくちまの乳母乃丈夫猶命  
のちん文

侍従

未つむ花の女房西めのくちまの乳母乃丈夫猶命  
のちん文  
あつむ花の女房西めのくちまの乳母乃丈夫猶命  
のちん文

つぎの歌

常陸のま乃つう人

女

右小同ーうき歌うの君のむらめやう  
まことまやう

中務

早本まふ  
いん

お茶茶の巻

宰相二人

誰のまふー お茶茶の目た右の樂の

左巻の侍をまふ

まをまふー人

た大ね

おふー日ま海波舞まひーに品品のまを  
おふかまーにまー人

中納言の君

藤重女房の女房 三条のまやに西まのまを  
ゆーまてまうまのれい命婦中納言の君中務

あまののくくたいめんーたりま

中務

右小同ー

源内侍の子

年あ十七八まのくちまの乳母乃丈夫猶命  
君小まひ又中納言のまひひくままのれい



くすくすのうらみも夢まふ源内侍のすけとも  
朝あまにりふ源内侍すけといひ一人は花よりては  
女上のまはらばつちまはらばつち

源理直

源内侍のすけをすれうすうすう

命婦

命の命婦あり  
若はまはらばつち

くすくす

命上の女房  
若はまはらばつち

花宴巻

夢巻

赤院

この院赤院よりわらひてはくすくす  
清父みうとの山名くすくす

宰相の君

夕暮の君のほろひし  
くすくすくすくすくすくすくすくすくすくす  
くすくすくすくすくすくすくすくすくすくす  
の君はまはらばつち

ちてき

夢上のくすくすくすくすくすくすくすくすくすくす  
たくくすくすくすくすくすくすくすくすくすくす  
源氏君の二重巻の女房源氏君の女房にあり  
命の命婦あり

仲ねの君

ひの命の君のほろひし  
くすくすくすくすくすくすくすくすくすくす  
東中巻の下あまは源氏君の中巻の君の  
くすくすくすくすくすくすくすくすくすくす  
くすくすくすくすくすくすくすくすくすくす



上野の山に花をばらけし中川のほとり  
とまひて花をばらけし中川のほとり  
とまひて花をばらけし中川のほとり

源内侍すけ お兼成  
まよひ

中納言君 藤上の女房  
まよひ

命婦 命の命婦  
藤原の命婦

柳 巻

赤衣の女御苗

赤衣の女御苗  
赤衣の女御苗  
赤衣の女御苗  
赤衣の女御苗  
赤衣の女御苗

内侍のこゝ

尼より一人はうりに朧月夜君内侍のこゝ  
にぬきよ

中将

権孫院の女房

横川の信成

藤原の女院の西のち父信成のち  
のちのちのちのちのち

中宮大進

藤原の女院の西のち父信成のち  
のちのちのちのちのち

五命婦 若菜の命婦  
まよひ

命婦 又命婦の若菜  
若菜の命婦

花散里巻

女

源氏君散らるる里の岸のほとり  
はくひとあそびし中川のほとり







左寧大郎

かね

まつむねの母方のいはいは更太郎ありてりより  
まつむねの女房例候とこのかねといひたり  
あしんあしんうぬ音そはつりつり

侍従

まつむねの女房  
まつむねの女房

圓屋巻

鎌倉巻

平内侍の子け

鎌倉の肘折巻の女侍秋女中の四方あ方  
にてむくふあそひ

侍従の内侍

右小目

おねの命婦

右小目一母の鎌倉の肘のいはいは更太郎

大郎の内侍の子け

そこの鎌倉の肘は徹殿の女侍後任女中の女の四方  
右方までむくふあそひ

中ねの命婦

右小目

おねの命婦

右小目

おねの中ね

兼葎院より初め鎌倉の肘折巻の女侍より  
おねをくせうしむ使ふあそひ

女侍

榊平小  
い

松風巻







氏部に

夕霧君あき尾附多ひ——日右大納言後任有と  
口——く作ひ——人

文章博士

口——附作文の執りさせ——人

大中年

口——附作文の撰作せ——人

大太夫

夕霧君察試うけさせりんとてその御代  
君の御前を御し——人附家う——人

或部大進

右ふ口——

大内記

夕霧君皇子の御師

重井屋の乳母

大進の御のし因を臣後任有唯君の夕霧君ふらひ  
まひ——のし御してさしきさひ——人——口——人

夕霧君の御しとておのし——人の右位下とせよ  
つとやさ——人後未御まき——人小判君のたりかあのみ  
右位下とせよつとやさ——人の御の御し——人  
それいさく夕霧君に又いさ

小侍従

重井屋の御房 小侍従や侍りこの御し——人  
まはら御の御し——人

宣旨

權勢流の御房  
羽衣まきゆら

宰相君

夕霧君の御し  
まき——人

玉言書

引更の御しとて肥後由とてひろくてう——  
くまひつていふおちえつらうまひひらめ——人  
いひのまらうまきまき——人君おけ——人——人年三十

大史監































中納言の君

保良君の御人  
早末まじり

中納言の君

上小町  
葵まじり

白文巻

紅梅巻

竹川巻

事おの君

おうらう君の女房 薫君おとらうて又いひし白ひよ  
まじりやとらうらふおとらうけし人又婦君と申  
君と花のしそひしとらうらうの事おの君と申  
右とて更方あり 咲とらうてうら散める花ふれしとら  
ふよとらうらうらうら

女房

名いへしに白葛君の女房 藤人のおのり小折  
うやとらうとあし人梅の君とらうらうらうらうら

大浦君

女房

口ー中君の女房 花のしそひのどらうれの膳方  
とらうらうて他の口ふらうらうらうらうらうら  
口ー翁方の女房 藤とらうてらな君の風とら  
とらうらうらうらうらうらうら  
中君の口ー口ーとらうに梅花とらうらうらうら

あねま

中納言の君

女房

口ー婦君の女房 藤人のおのりとらうらうら  
名いへしに清水城の今女房 藤君の  
竹川の女房  
竹川の女房の口ー口ーとらうらうらうらうら  
とらうらうらうらうらうらうら

橋姫巻

宇治の十帖







早蕨巻

空居の中君の女房

~~~~~人

名はつと申る者二束巻しつらうれすか付車  
にのまをうらまへりてはなほいとくまふよ

空居の殿の人

梅原まは  
い

事しき

上野の女

所又清くつかし申すまはりてく殿上人  
まはりいひまはりい

右京を文

白まの信のつと

おふり信於

申すまはりてはふまはりてはりてはりては  
まはりいひまはりい

梅原の君

梅原の君のつと

申君の女房

二人をいふは梅原の申君の道舟より申  
東にりふちりては梅原の女房をいふは  
とすは梅原の女房をいふは梅原の女房を  
そとに梅原の女房をいふは梅原の女房を  
あめれは梅原の女房をいふは梅原の女房を  
いふは梅原の女房をいふは梅原の女房を

おぬの君

申君の女房申君のほひのつと

ま

梅原まは梅原のつと  
梅原まは梅原のつと

空居の女房

梅原まは



常陸のこの娘のあや

名をえんくさの娘とらふた道あるのちか  
あり

源少納言

孝隆君のむこ  
父権もあ

後従者

お小日

幸

中宮様は——  
おはらけのきりぎりすのうたをうたへ  
おはらけのきりぎりすのうたをうたへ  
おはらけのきりぎりすのうたをうたへ  
おはらけのきりぎりすのうたをうたへ  
おはらけのきりぎりすのうたをうたへ

年次けつ

昭宗申すの侍中がまはるまはる——  
お使ふまはる——

侍

孝隆の侍の尾とて東の侍の侍の侍の侍  
——おまはるまはる(まはる)——

殿の人

おはらけのきりぎりすのうたをうたへ  
おはらけのきりぎりすのうたをうたへ

侍従

侍母君の侍侍母君と東の侍より侍のま  
にせまらるのわくありせ——侍母君にのりてまはる

——人懸船まに侍母君とせまひ——後白(まはる)の  
よ——侍母君と侍母君の侍母君とせまひ——

おはらけのきり

中宮の侍  
おはらけのきり

中宮の侍

後白(まはる)



浮城巻

大内記及定

即ち少瀬と名の書る所の歌可太極大浦仲信  
むしるふらあつて白雲にまゝいゝまゝいゝ  
いゝまゝいゝ白雲思ひいゝまゝ思ひのまにまゝいゝ  
浮城巻のまゝいゝ一葉田舎いゝまゝ思ひのまにまゝ  
因記にまゝのまゝとあつたりいゝまゝ

因幡ちり  
箱とちり

白雲は舟をた具いゝまゝいゝまゝいゝの因幡ちり  
いゝまゝ思ひのまにまゝいゝまゝ思ひのまにまゝ  
いゝまゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝ

由良所

いゝまゝ思ひのまにまゝいゝまゝ思ひのまにまゝ  
いゝまゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝ  
白雲のいゝまゝ思ひのまにまゝいゝまゝ思ひのまにまゝ  
いゝまゝ思ひのまにまゝいゝまゝ思ひのまにまゝ

男

因舎人

いゝまゝ思ひのまにまゝいゝまゝ思ひのまにまゝ  
いゝまゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝ  
いゝまゝ思ひのまにまゝいゝまゝ思ひのまにまゝ  
いゝまゝ思ひのまにまゝいゝまゝ思ひのまにまゝ

右近右史

右近右史

上巻

中巻の巻は毎巻のいゝまゝいゝまゝいゝまゝ  
いゝまゝ思ひのまにまゝいゝまゝ思ひのまにまゝ

おねの君

中巻の巻は  
いゝまゝ思ひのまにまゝ

浮城巻

女

浮城巻のいゝまゝ思ひのまにまゝいゝまゝ思ひのまにまゝ  
いゝまゝ思ひのまにまゝいゝまゝ思ひのまにまゝ  
いゝまゝ思ひのまにまゝいゝまゝ思ひのまにまゝ  
いゝまゝ思ひのまにまゝいゝまゝ思ひのまにまゝ

小景お君



大郎

大納言君

弁のおのや

申お君

女

女

幕府の女ごの家の女ごをさるうしおのい  
このいそめひてまのいそひ〜

今上の女ごの女ご申おのいそひは母  
君のいそをいり〜

い〜女ごのいそ乃女ごおひた〜

右の〜花のいそ〜

い〜おのいそ〜の女ごをさる女ごのい  
〜

幕府のいそをいり〜

右を大文

浮母をい

内舎人

よふい

宇治の河原梨

今、津所ふあ〜

侍候

浮母君の女房  
おをさる〜

まのいそ

室あり

侍二人

侍候

いそ

右をいそ

幕府のいそをいり〜

横川の侍候のいそは母君のいそをいり〜

浮母君のいそ〜

いそをいり〜



夏中納言

小中の尾君の筆の中納言の趣い一本夏中納言  
のほろろうまいたくはむいすふやうあねをせ  
とあまうらなとらふに河海小夏中納言ハ野原君の良  
とま後とまきの方で納言のう一ぬ月おはほせうた  
うあうまう一とるくぬハ河海の沈語ひく

たつ

小中の尾君の仕ひ人どもか一き人といふ

ま

口一あのまらひ

ま

口一あの仕ひ人のゆらけんそちうらうら  
てしうらうら

寧ろおのま

廿二の廿房  
野原君にま

夏中納言



